

一つ順位を上げたが、関係者の中には落胆もあった。

独自系統育て 審査でも一目

ただ、十勝農協連などは、課題の一方で順位には見えない成果を評価する。5区や7区など多くの区で道産種雄牛の血を継ぐ牛が出品されたのはその一つ。霜降り肉の度合いを重視して特定の系統や種雄牛に遺伝が集中する中、北海道は独自の道産和牛の系統で挑戦する試みだった。

和牛全共の穴田勝一審査副委員長は「独自の系統を使いながら高いレベルで牛をそろえてきた。発育良く体格が作られた牛が多かった」と道勢の牛に一目を置いた。西部博寿畜産部長は「道産の牛で勝負できて、一定の成績を収めることができた。市町村も農場も違う中、調教を重ねて同じレベルの牛をそろえたチームワークがあった」と取り組みを評価。酪農が中心で和牛飼育の歴史は浅いが、北海道の和牛生産を全国にアピールした。

その結果として団体表彰では6位に入賞した。各区の上位入賞のポイントを加算した結果で、道勢の総合力が

上がった証しだった。北海道出品者の団長で北海道和牛登録協会の佐藤弘一会長は「今までは入賞には届かなかった。素晴らしい結果」と初の入賞を喜んだ。

全共の会場で牛1頭にかける人数の多さやバックアップ体制、「出発時と別の牛になる」という出品牛の調整方法など、好成績を挙げるには経験豊富な九州に学ぶところは多い。

課題と手応えをつかんだ和牛全共。7区の種牛群に出た清水孝悦さん(40)＝池田＝は「成績に満足はしていないけど、やりきったという気持ち。結果を受け止めて次につなげないといけない」と早くも5年後に目を向けた。



仙台市で7～11日に開かれた第11回全国和牛能力共進会宮城大会（和牛全共、全国和牛登録協会主催）。5年に1度の「和牛のオリンピック」に全国から500頭余りが出品され、十勝勢も健闘した。和牛の産地づくりに向けて、大会を通して見えた課題と成果をレポートする。

和牛産地への挑戦（下）

2017年9月27日

質高め 真の畜産王国に



和牛全共で道代表の牛舎に掲げられた横断幕。日本を代表する産地をつくれるかどうか、十勝の力が試されている

全国和牛能力共進会宮城大会（和牛全共）に出品された道代表の牛に対し、「種牛能力」を課題に挙げる声は少なくない。種牛能力は、繁殖性の高さや、飼いやすさといった生産性向上につながり、和牛に求められる能力の一つだ。

府県と差実感 種牛能力課題

北海道の和牛は、飼料環境に恵まれて体が大きく産肉能力が高い一方、種牛能力は府県産に見劣りした。和牛全共の審査項目では、繁殖性を表す「品位」や、体つきのバランスの「均称」などに当たる。道内の出品者は

「上位の府県の牛は近くで見ると、毛づやや体の締まりが違う。牛を良く見せる技術も高い」と差を実感した。

経済動物としては産肉能力も重視される中で、種牛能力の向上にどう取り組んでいくか。北海道和牛や十勝和牛の方向性が、全共の舞台で改めて問い直された格好だ。十勝農協連畜産部の山中格さんは「今のままでは勝てない。勝つための要素を入れ、いかに北海道らしさを残していくか。5年、10年先を考えながら生産者と話していきたい」と語る。

過去最多出品 十勝にも期待

その中でも北海道和牛への評価は少しずつ変わりつつある。全共では、道産の種雄牛「勝早桜5」などの系統の牛をそろえて出品したことで、子牛だけでなく繁殖雌牛の改良技術の向上をアピールした。

全共を取材した畜産ジャーナリストは「十数年前の北海道は、牛の数は多いがレベルはまだ低かった。今回は『勝早桜5の系統はいい牛だ』という声を会場で聞いたし、レベルは上がっている」と感想を語った。

道内で飼育する黒毛和種の繁殖雌牛（肉専用種3歳以上）は5万3000頭で、鹿児島、宮崎に次いで全国で3番目に多い。ホクレン十勝地区家畜市場は、黒毛和種の子牛の取引頭数で全国一。府県の和牛繁殖農家が高齢化で離農する半面、道内や管内は農場の大規模化などで頭数を維持しており、北海道和牛への期待は相対的に高まっている。

全共を主催した全国和牛登録協会は「今の（体格の）